

東京の水産業振興に向けた専門懇談会（第2回）議事録

日時：令和5年11月2日（木曜日） 09時30分～11時20分

場所：八丈支庁大会議室

小口課長代理	<p>〈開 会〉</p> <p>それでは定刻となりましたので、只今から令和5年度東京の水産業振興に向けた専門懇談会第2回を開催いたします。</p> <p>事務局の小口です。議事に入りますまでの間、進行を務めさせていただきます。</p> <p>本日の委員の皆様の出席状況でございますが、オブザーバーの日比様も含め、6名全員のご参加を頂いております。</p> <p>次に配布資料の確認をさせていただきます。</p> <p>まず議事次第、出席者名簿と座席表、本日の説明資料として、「東京の水産業振興に向けた専門懇談会第2回」というカラー刷りのA4の横版のものをお配りしております。</p> <p>不足等がございましたらお声がけください。</p> <p>なお、本日は、今、画面に写っておりますが、築田農林水産部長と鈴木安全安心地産地消推進担当部長が本庁からのWEB参加となっておりますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>なお、本日の懇談会は、後日アーカイブ配信を行ないます。また、議事録は公開されますのでご了承ください。</p> <p>それでは議事に入ります。</p> <p>ここからの進行につきましては関座長どうぞよろしくお願いいたします。</p>
座 長 (関委員)	<p>はい、よろしくお願いいたします。座長の関です。</p> <p>会議が活発かつ円滑に進みますように皆様のご協力をよろしくお願いいたします。</p> <p>それでは、早速、議事の「懇談会での意見を踏まえた今後の施策の展開について」を進めてまいりたいと思います。資料の説明を藤井水産課長から、よろしくお願いいたします。</p>
藤井水産課長	<p>水産課長藤井です。改めましてよろしくお願いいたします。</p> <p>先日の第1回専門懇談会で皆様からご提案頂きましたご意見をもとに、施策の方向性について整備いたしました資料を作成しました。</p>

本日は、この内容について、また、昨日の視察等も踏まえて、御議論いただければと思っております。

お手元のカラー刷りになっている「東京の水産振興に向けた専門懇談会第2回」、こちらの資料で、ご説明を進めてまいりたいというふうに思います。

それでは早速説明に入ります。1枚表紙をおめくりいただきまして、水産専門懇談会を踏まえた施策展開の方向性①という資料をご覧ください。

資料は、カラーでそれぞれ5つの分野をまとめておりまして、①から⑤までとなっております。これから順次説明をして参ります。

まず、政策の展開の方向性①、海洋環境分野でございます。

改正業法に基づく資源管理の推進や海水温上昇等の海洋環境変化への対応についていただいた主なご意見をもとに、施策の方向性と今後検討すべき課題の取りまとめをおこなっております。

スライドの左側をご覧くださいと思います。

委員からの意見とございますのは、第1回の懇談会で皆様からいただきましたご意見のうち、特に重要と思われる部分につきまして、記載をしたものでございます。

ここではいただきましたご意見を2つの視点で取りまとめ、お示しをしております。

まず1つ目の視点でございますが、資源管理でございますが、委員の皆様から、特に島しょ地域の重要な水産資源であるキンメダイの資源管理を進めていくために、国の水産政策審議会、またステークホルダー会議などの場で提言を行うという取り組みに加えて、資源が悪化する前に、特にキンメダイを中心とした産卵親魚の保全にしっかり取り組むべきだといったようなご意見をいただいております。

国によるTAC管理の魚種の拡大に備えまして、キンメダイ以外の主要な魚種についても、漁獲情報の迅速な収集体制の構築をすべきというご意見をいただきました。

その際、DXの活用、あるいは国、他県との情報共有などの視点も重要である、というコメントを頂戴しております。

2つ目の視点でございますけれども、海洋環境の変化、こちらでは海水温の上昇など海洋環境が変化する中で、海洋環境変化の把握、また漁獲減少の要因の究明を進めるべきだという意見。

また、藻場の保全など海洋環境の回復に取り組むことが重要である、というご意見に加えて、特に藻場の創造保全などの取り組みの結果、生じるブルーカーボン、ブルーカーボンクレジットの取引、これは新たなビジネスチャンスになるのではないかというご意見を頂戴致しております。

このようなご意見を踏まえまして、私たちが現在検討している事項を、右側に、施策の方向としてお示しをしております。

まず第1点目の視点の資源管理についてでございますけれども、現在も国への提言などを行っておりますし、公的な資源管理、漁業者による自主的な資源管理を行っているところではございますが、その資源管理の推進に必要な、より精度の高い資源評価のための調査の拡充や大学と連携したキンメダイ等の移動生態の解明、こういったものを検討して参りたいと考えております。

あわせて、都の主要魚種の資源管理に必要な漁獲量、漁場の位置等、そういった情報をスピーディーに収集する為、デジタル技術を活用し、迅速な操業情報を収集する体制を構築して行くことを検討して参りたいと思っております。

次に2つ目の視点でございます。

海洋環境の変化についてであります。海洋環境の変化や旅客減少の要因の究明などを進めるべきといったご意見がございましたので、調査、研究の拡充に加えまして、施設や設備など研究基盤を強化することを検討してまいります。

また、磯焼け等海洋環境が変化する中で、気候変動に対応した漁場造成の推進、またその過程で生じるブルーカーボンのクレジット化、こういったことについても、検討を進めてまいりたいと考えているところでございます。

右下の欄にございます、今後の課題というところでございますが、こちら中長期的な検討事項をまとめたところとなっております。こちらには、国によるTAC魚種の拡大などを見据えた単一魚種に依存しない複合的な漁業操業形態への転換、こちらの検討をあげさせていただきました。

以上が、海洋環境分野についてのご説明になります。

関座長よろしく願いいたします。

座長

はい、ただいま方向性の①という部分について説明をしていただきました。

この部分について、ご意見ご質問等ありましたら委員さん挙手していただければと思います。

木村委員

はい、こちらでよろしいと思います。

特にデータの収集体制なのですが、それぞれ漁師さんが持っている漁場というものがある、その情報共有というのが、全国的にもそうなのですが、なかなか難しいところなのですが、東京都に関しては、情報共有できるような体制を、なるべく漁師さんたちのご理解を頂いてやっていくことが、全ての人がウィンウィンの関係になるというのが大原則だろうと思っておりますので、その点のご理解を漁師さんたちにも頂けるようにしていただきたいというところでございます。

藤井水産課長	<p>こちらにつきまして、本年度から漁業者の皆さんに協力を求めるべく、取り組みを進めておりました、キンメダイにつきましては漁場の位置とか漁獲量こういった情報を入力いただけるような方を、100名弱になりますが、今募っているところです。データについては、内部で共有するという事で漁場の位置とかも情報としていただけるような協力体制を、今ちょうど構築しているところでございます。</p>
木村委員	<p>それに加えて遊漁の問題もありますので、遊漁の情報もきちんと得られるようにするのが肝要だと思います。その点も合わせてよろしくお願いします。</p>
藤井水産課長	<p>ありがとうございます。</p>
座長	<p>ありがとうございます。 他にいかがでしょうか？</p>
三浦委員	<p>資源については、漁獲情報を収集し、国が中心となって、水産庁とは別に独立した水研センターが評価を行っていきとなっておりますが、北海道などで起こっていることですが、県の水試と水研センターとの意見が、大きく食い違っていることも多々あります。そうした中、漁業者もどっちについて良いのだろう？どっちが正しいのだろうかと色々悩んでしまうことが多々ありますので、しっかりと情報共有をしていただきながら、かといって国に阿ることなく、県として調べた結果があったら、堂々と発表してもらいたいと思います。</p> <p>また、昨日思ったことですが、魚種がキンメダイ一本になってきており、カツオの漁獲量も減ってきているとありましたが、八丈島について見てみると、19tまでの漁船があると言いましたが、実際は10t未満の漁船が多く、あまり沖に行けないのではないかと、沖に魚がいるのに取りに行けないのではないかと、それとも海水温によって獲れなくなっているのではないかなど、しっかりとその原因究明を行わないと次に進めないのではないかと思います。沿岸漁業なので、来遊してきた資源をフル活用するしかない状況であり、しっかりと対応していく必要があると思います。</p> <p>漁獲する魚種が変わってきている中で、加工屋さんとのミスマッチも起きています。これから、どんな魚が漁獲され、どのように利用していくのかも含めた方向性を出していかなければならないと私は思います。</p> <p>以上です。</p>

藤井水産課長	<p>後段のご意見につきましては、また次の分野の中でご説明をしたいと思いますが、特に調査等の部分で島しょ農林水産総合センターの所長からコメントあればお願いいたします。</p>
中野島しょ農林水産総合センター所長	<p>島しょセンターでも、海洋環境の変化に合わせて、例えば小笠原で獲れているものが伊豆諸島の海域で獲れないか、そういったような新しい視点で調査を進めるように、取り組みを開始したところです。</p>
座長	<p>はい、ありがとうございます。</p> <p>今回、現場を少しだけ見せていただいて、それですべてが分かったわけではないのですが、今後の検討ということで、単一魚種に依存しない、それはもう絶対必要があると思うのですが、ただ複合的な漁業操業形態の転換と言われても、どういう可能性があるのかというのは、漁業者さん自体わかりません。そうすると、どういうモデルがあるというのを示せない、これ書いただけの文だけになってしまうと思うので、そのあたり実態を伴った提案が必要だと思います。難しいというのは、すごくわかるのですが、そう思いました。それから、これは常にずっと言われていることですが、例えばキンメダイですと東京都だけではない問題です。静岡県、千葉県、神奈川県などの関係する県があるので、そこでの調整というのが、海区の時でも必ず出ることではあるのですが、絶対必要です。いくら東京都だけが頑張っても、全体でやらないと、同じ漁場を使っていることもあると思います。</p>
藤井水産課長	<p>前段の部分につきましては、島しょセンターでも、海洋環境の変化によって獲れる魚が変わってきているということで、どういった魚がどれぐらい漁獲されるかという調査をこれから進めていくことも検討していただいているところでございますし、やはり漁業操業形態を転換するといっても、漁業者の皆さん、初期投資がかなり負担になる部分もございますので、先ほど関座長もおっしゃられました経営モデルと併せて、転換時の支援策などについても、今後、今日いただいたご意見を元に検討を進めていければと、思っているところです。</p> <p>また、特にキンメダイにつきましては、当然、近隣県との調整連携重要でございますけれども、やはり主要な漁場につきましては伊豆諸島海域ということで、その中でも東京都がイニシアティブをとれるように、調査等の充実もあわせて、東京都としてしっかりと都の立場を説明できるような、調査などを進めていければと思っていますところです。</p>
副島委員	<p>単一魚種に依存しないという所に関連してですが、今、とにかく漁師のみなさん、キンメダイを獲りに出るとのお話でした。昨日お伺いした中でも</p>

	<p>し私の聞き間違いですとか認識違いだったらご指摘いただければと思うのですが、漁師さんたちはキンメダイが高値がつくからということで獲りに行っているのだけれども、でも実際、出荷経費などを差し引いたら、漁師さんの手取りになるところは、実はそうでもないのだよと、お聞きしたと思うのですが、そういったことを漁師さんたち自身が知ったり学んだりする機会というはあるのですか？</p>
藤井水産課長	<p>そうですね、なかなか経営的な部分を東京都の方から説明するという機会がこれまであまりなかったというのが正直なところじゃないかと思うのですが、やはりこれからは経営の視点と言ったところも、漁業者に持っていただく必要があると思います。これから魚が獲れる量が少なくなってきている中では、獲れるものをしっかりと付加価値つけて、あるいは逆に経費を抑えながら獲っていくという取り組みなども、漁業者の皆さんにやっていただく必要があると思います。後ほど経営のところ、そのような観点からも、ご意見をいただいておりますが、末端の漁業者にもそのようなことを知っていただく機会というのは重要だと思っています。</p>
副島委員	<p>そうですね。 もっと知る機会、学ぶ機会があればいいなと思いました。</p>
座長	<p>はい、ありがとうございます。 他に何かございますでしょうか？</p>
三浦委員	<p>施策の方向性のところで、気候変動に対応した漁場造成の推進というものがあるのですが、今、考えられている漁場の造成は、どういったものを考えられているのかあれば、教えていただきたいと思います。</p>
藤井水産課長	<p>これも検討段階のものでございますけれども、伊豆諸島では磯焼けが非常に進んでおり、採介藻漁業が大きな主要漁業になっておりますので、こういった磯焼けは非常に大きな課題と考えております。そういう中で比較的高水温でも生育する藻類、こういったものを増やすような取り組みなども、今、検討しているところでございます。また、天草とかトサカノリといった伊豆諸島特有の海藻でございますが、こういったものの種苗生産技術も、島しょセンターで、これから研究なども進めていただくようなことも検討してございます。</p> <p>こういった藻場を増やす取り組みを、非常に海洋環境が厳しい中でありましてけれども、どういったことができるのか、検討を進めていきたいなと思っております。</p>

三浦委員	藻場造成を中心にやられていくということですね。
藤井水産課長	はい。
座 長	<p>他よろしいでしょうか？</p> <p>また最後に全体として意見をお尋ねしますので、もし言いそびれたことがあったらその機会を使っていただければと思います。</p> <p>では、次の方向性②について説明をお願いします。</p>
藤井水産課長	<p>オレンジ色のシートになります。続いて施策の方向性②経営分野でござい ます。</p> <p>皆さまからいただきましたご意見を、2つの視点で取りまとめを行ないま した。</p> <p>まず、最初の視点でございませう。漁業協同組合の経営でございませうが、第 1回の会議の中で、海洋環境の激変によって漁獲の減少が続いており、この まま漁業の衰退が進みますと、漁業の都民・国民への水産物の安定供給とい う役割が果たせなくなるといったご意見をいただいております。また、漁業 協同組合の職員の確保の観点も、特に漁獲が落ち込んでいる、伸びていな い、期待できない中で、収益力の高い経営体への転換が漁業協同組合の経営 においても必要であろうといったようなご意見をいただいております。</p> <p>次の2つ目の視点であります。漁業所得の向上でございませうが、やはり漁 獲が減少を続ける中で、高付加価値化、未利用魚・低未利用魚の活用、養殖 業の検討なども行うべきといったご意見を頂戴しております。また、獲れる 魚種も海洋環境の変化により変わってきていることから、操業転換の支援や 新たな販路開拓等の支援も必要と言ったご意見を頂戴しております。また、 魚価の向上には、海外販路開拓も視点として重要ではないかというご意見が ございましたので、挙げさせていただいております。</p> <p>このようなご意見に対しまして右側になります。我々が現在検討してい る施策の方向性ですが、まず1点目の視点、漁協の経営につきましては、次 の視点の中でも説明する所得向上と合わせまして、経費の削減という視点か らDXの活用による漁協業務の効率化を検討して参りたいと考えておりま す。</p> <p>次に2つ目の視点でございませう、漁業所得の向上につきましてでございま せうが、加工場等の衛生管理体制の改善、生産物の品質向上の取り組みの支 援、漁獲魚種の変化に対応した新商品開発や販路開拓等の支援、漁業生産団 体の海外販路開拓の支援、このようなことを検討して参りたいと思ってい ます。</p>

<p>座 長</p>	<p>このような取り組みによりまして、限られた漁獲でも、漁業所得の向上に繋げていきたいと考えております。</p> <p>なお、今後の検討事項と致しまして、陸上養殖の導入、操業転換支援、このようなことも合わせてあげさせていただいております。</p> <p>以上経営分野についてのご説明になります。</p> <p>関座長よろしく願いいたします。</p> <p>はい、説明ありがとうございます。</p> <p>今、ご説明ありましたけれども、このことについて、ご意見ご質問ありましたらお願いします。</p>
<p>中奥委員</p>	<p>DX の活用による漁協業務の効率化ということなのですが、これなんか具体的なソフトウェア開発とか、そういう事でしょうか。</p>
<p>藤井水産課長</p>	<p>こちら、特に漁協の荷捌き業務、昨日も水揚げの作業を見ていただきました。昨日は非常に水揚げが少なかったもので、コンパクトな作業でしたけれども、漁獲が多くなる時期については、順番待ちの行列ができる状況です。現状、漁協職員が計量作業などを手作業でやっておりますが、このようなものを機械化するであるとか、漁獲情報を、例えば、電子ばかりなどによって、いわゆる一気通貫で計れば、伝票の起票から何からできてしまう、データの収集もできてしまうといったようなものを、作っていけないかということを検討していければと思っております。</p>
<p>中奥委員</p>	<p>分かりました。</p>
<p>木村委員</p>	<p>それに関連してですが、昨日見ていたら籠の中にポンと入れて、1尾あたりの重量を計ってないですね、あれはどういうふうに今後やられていくのでしょうか。</p>
<p>藤井水産課長</p>	<p>漁協によっては、例えばキンメダイなど、計量器で1尾ずつ計っているようなところもございますし、八丈島の場合は、大中小というサイズに分けて目方でやっておりますが、資源管理の観点からは一尾ごとのデータが非常に重要になってきておりますので、今後、そういった計量システムを主要な漁協には、導入するようなことも考えていきたいと思っております。</p>
<p>木村委員</p>	<p>そうですね。</p> <p>やっぱり1尾当たりのものがないと、重量と体長ですね、無いとダメなので、ぜひそれを進めるようにしたらと思います。</p>

藤井水産課長	<p>ありがとうございます。</p>
三浦委員	<p>漁協の経営ということですが、水揚げが減って、氷も油も資材もすべての使用量が減っていく中で、漁協経営は非常に厳しくなっていると思います。それに対しての施策として、高付加価値化や未利用魚の利用促進ですとか、魚の値段を上げていく努力をしていかなければならないと思います。水揚げ量が半分になったら魚の値段が倍になれば手数料としては同じことになります。単純に計算すると減少分が0になるということです。やはり活〆をしながら付加価値を上げるとか、一手間二手間かけながら、魚の単価を上げていく、そうした方向性を打ち出していかなければならないと思います。</p> <p>また、DX では、国もスマート水産業に対する伴走支援体制を作るということで、水産業、漁業や漁協にどうやってDXを根付かせていくか、企業の伴走支援を受けながら進めていく方向性に、今予算が新たにつきそうな感じになっていますので、そういったものも活用しながら、進めたら良いのかなと思います。</p> <p>海外販路の拡大について、日本全国が海外販路拡大という動きをしている中、中国、香港等が、ALPS処理水の問題で輸入を止めている現実において、コロナ前のインバウンドによる飲食費を計算すると、大体1.8兆円ぐらい外国人が使っています。来日外国人は2700万人程度来ており、1.8兆円ぐらいお金を使用しています。そのうち水産業を考えた場合、すごく大きな金額が動いていると思います。東京には豊洲市場もある中で、このインバウンド需要をどう取り込んでいくか、それを島の魚にどのように活かしていくのか、ここが重要なポイントだと私は思います。</p>
藤井水産課長	<p>インバウンドについては、観光セッションとの連携とか協力、こういったものが必要になりますので、今日いただいた意見をもとにどういったことができるかと言うことを、検討してみたいと思います。</p>
座長	<p>ありがとうございます。</p> <p>ちなみにそのインバウンドは、海外からの観光客数というのは一定数あるのでしょうか。</p>
藤井水産課長	<p>今データの方は持ちあわせていないのですが、コロナ以降コロナが落ち着いてから、中国を除いてコロナ前の水準にも戻ったというような報道も聞いております。東京でも非常に海外のお客さんが多くみられるような状況かと思えます。</p>

座 長	はい、ありがとうございます。
副島委員	先ほど発言した部分と関連してきますけれども、方向性②の今後の検討のところでいきなり陸上養殖の導入ですとか、操業転換の支援とあるのですが、やはりまずは第一歩として現状を知る機会を創出といいますか、学習機会があって、次どうしたらいいかと、漁業者自身も考えられるような場を作るというのは非常に重要ではないかなと私は考えます。
座 長	例えば、DX の活用とか、システム化をしていくという中で、そのシステムを作る、IT 関連の人、技術を持った人達は、どういう人を想定していますか？
藤井水産課長	そうですね、システム自体は市販のものであるとか、水産の世界でも、操業情報の収集を含めて、様々な企業も立ち上がっている状況でして、我々、そのような情報収集をさせていただいているところです。一方で実際に使うのは漁業者の皆さんであるので、いかに良いものを作っても使ってもらえないと、これはどうしようもないことなので、作りっぱなしにするのではなくて、作った後も漁業者の皆さんに使いやすいように改良を加えていくであとか、漁業者の中にも昔、コンピューター関係の企業に勤めていらっしゃったような方もいらっしゃいますので、そういった方に核になっていただいて地域をまとめていただくとか、漁業者の意見をまとめていただくというようなことも検討できるといいのかなと考えています。
座 長	それはすごくいいことだと思います。 私が、なぜこのような質問したかと言いますと、実際、そういう人がいるのかどうかかわからないし、夢のような話かもしれないけれども、今朝、ホテルの様々な情報、地図などが挟まっているところを見ていたら、八丈島に移住してきた人の特集を定期的に出しているようなチラシがあり、それを見ていたら、IT 関係をやりながら仲間と一緒に移住してきましたとか、そのような若い人も居るみたいなので、新たに島に入ってきた人たちと漁業者さんを含め島の人たちが連携をして島のことを考えるという流れができたらいいのではないかなと思ったところです。
藤井水産課長	こちら最後の内水面振興のところでも出ておりまして、外部の方の知識とかネットワーク、こういったものを活用するという視点から、海面についても重要だというふうに思っております。 ありがとうございます。

座 長	その他いかがでしょうか？
三浦委員	<p>陸上養殖の導入とあるのですが、島の中に土地が少ない中で、陸上養殖を漁港のそばでやるというイメージをされているのか、どのようなものをイメージしているのか教えていただきたい。</p> <p>陸上養殖となると、建築屋さん等が陸でやるイメージがありますが、漁協や漁業者が陸上養殖をやる場合、どんなイメージをされているのか教えていただければと思います。</p>
藤井水産課長	<p>はい、これも中長期的な課題と言うことで、将来的な課題との位置づけをさせて頂いておりますが、特に島で陸上養殖を考えた場合に、魚類と言うよりは、例えばトコブシとか、こういったものは昔はこの八丈島でも沢山獲れていて、島民からも非常に根強い需要はありますが、今全然獲れてないという状況がありますので、手始めてとしてはこういった貝類の陸上養殖などが、可能性として有望なのではないかと思っております。</p> <p>色々と閉鎖型のシステムなども全国的に普及しているような状況でございますけれども、都の島しょセンターで将来的な試験研究課題として、貝類を中心とした陸上養殖の可能性について検討していける余地があるのではないかと考えております。</p>
中野島しょ農林水産総合センター所長	<p>島しょセンターとしては、コストがどれぐらいかかるかというのが大きな問題なのですが、地域の他の産業と連携するとか、そういったことも考えられますけれども、まず最初に実験する施設、八丈島の事業所も建て替えの計画がありますし、大島事業所も建て替わったという中で、そういう試験ができるような整備をして、様々なことを模索して行きたいと考えております。</p> <p>地元でも新たな取り組みについて非常に期待の声が出ておりますので、それにも答えられるのかなというふうに思っております。</p>
座 長	<p>他に何かありますでしょうか？</p> <p>そうしましたら次の施策展開の方向性③について説明をお願いします。</p>
藤井水産課長	<p>それでは、施策展開の3ページ目になります。</p> <p>施策の方向性③、マーケティング・ブランド化分野でございます。</p> <p>視点といたしましては、対象を絞ったマーケティングということで整理をさせて頂きました。重ねてになりますけれども、獲れる魚が減ってきているという現状の中で、少ない魚をいかに高く売っていくか、こういったことが求められている状況ではありますが、魚の値段が高くなってしまいますと、なかなか買わなくなる層も出てくることも予想されますし、一方で、こういう</p>

高くても、良いものであれば買っていただけるという、2 極分化するのではないかというご意見をいただいております。消費者をひと括りにするのではなく、魚の価値が高くて購入していただける層への働きかけが重要であるというご意見をいただきました。

またその際、特に購入決定権を持つ女性に向けたマーケット戦略の構築、こういったことも有効ではないかというご意見をいただいております。特に、美味しい魚食べたいのだけれども調理の時間がないというような、ニーズと現状とのギャップを埋めるような商品やサービスがあればいいのではないというご意見をいただいております。

また、全国の漁村地域には、消費者のニーズをしっかりと捉えて、商品サービス提供されている女性起業家なども多いというふうに、前回ご意見をいただいております、そういった漁村の女性の起業家の取り組み事例の収集などによりまして、担い手の発掘あるいは育成につなげていくことも重要だというご意見を頂戴いたしました。

このようなご意見に対しまして、政策の方向性の右側でございますが、例えば、環境とか資源に配慮した消費行動でありますエシカル消費という言葉が今、様々マスコミなどで言われておりますが、このエシカル商品を志向する消費者に対して、資源の持続性に配慮したブルーシーフードのような魚の普及、消費の推進をしていくということも検討していければと考えております。

加えて東京産の水産物を消費者に訴求する場と致しまして、例えば子育て世代の女性を対象とした料理講習会等のイベントの開催、こういったことも検討して参りたいと考えております。

さらに他地域への視察、交流の場への参加への支援、こういったことも検討いたしまして、収集した取り組み事例の活用、多様な担い手の育成に繋がっていきたいというふうに考えているところでございます。

以上が、マーケティング・ブランド化分野についてのご説明になります。座長よろしく願いいたします。

座長

はい、ありがとうございました。

では、この方向性③マーケティング・ブランド化に関してのご意見ご質問等々ありましたらお願いします。

副島委員

どこに向かって、誰に向かってという対象を絞ってマーケティングをしていくということがいいと思います。どういったところを対象にしていくかは、都の職員だけが考えるのではなく、現場の人たちと戦略を練っていくというのはすごく重要ではないかと思っています。

先ほど、子育て世代の話とか、魚を買いたい人向けという言葉も出てきた

	<p>ところですが、私も、昨日、女性部に行った時に、本当に現地で獲れた魚で現場で作った加工品が冷凍庫の中にあると、美味しそうだし、便利そうというところで、買いたいと思いました。そういうところにフィットする層というのは確実にいると思うので、どうやってアクセスしていけるかというのを考えた方がいいですし、今日のクサヤの加工場でも、焼くときの匂いという課題がありますけれども、商品としてはすごく魅力的ですし、今一般的に干物というのは、根強い、若い層も買うということで、スーパーでも一定程度需要があるようです。フライパンでも手軽に焼けるというので非常に人気は根強くあるところなので、このようなポテンシャルを持った加工品が八丈島の中にたくさんあるのだなと改めて認識しました。</p> <p>ただ、女性部でもクサヤ加工場でも、加工したい、加工をもっとやって行きたいと思っているが原料が入らない、原料が入らないのは資源の問題だけではなくて、生産者がいない、生産者がいても自分たちが使うような加工する魚を獲らないというような話があったので、生産者は何を獲るか、どのような魚から獲っていくのかという時に、島の加工関係の人も含めての戦略を皆で考えていくというのは、改めて必要だなと思ったところです。</p> <p>漁業だけのことを考えるのではなく、一緒に考えるというのは非常に重要だと思いました。</p> <p>1つ質問ですが、このページだけ、今後検討項目が無いのは何故なのですか？</p>
藤井水産課長	<p>特にこのページを意図して除いているわけではなく、内容がすぐにでも取り組まなければいけないし、取り組む課題なのかなということで記載してありません。中長期というよりは、速やかに施策の方向性として進めていきたいという現れでございます。</p>
副島委員	<p>後回しというわけではないのですね。</p>
藤井水産課長	<p>ボリューム的には少ないのですが、ここは非常に重要なセクションだと思っております、長期的なんて悠長なことではなくてすぐにでもということで、速やかにやっていくべき事項としてまとめているところでございます。</p> <p>ここに書いていること以外にも、昨日今日の視察なども踏まえて新たな視点など、あるいは施策等がありましたらご意見を頂戴したいところでございます。</p>
座長	<p>はい、ありがとうございます。</p>
三浦委員	<p>資料でブルーシーフードの普及、エシカル的な消費を進めていきたいと書</p>

	<p>いてあるのですが、国でも地域の認証制度とか、エコラベルの制度がある中で、東京都の場合、島が中心となっているので、全体として取りやすいようなイメージがあるのですが、こういったものを推進することで、消費者へのアピール度を上げていくとか、注目度を上げていく、そうした戦略を、中長期的な項目で入れておくのも良いと思っています。</p> <p>それから養殖業においては、マーケットイン型養殖といって売り先をある程度決めてから、そこに合う魚を作っていくということが主流になってきていますが、漁船漁業はそういうわけにもいきません。獲れた魚をプロダクトアウトという形で売り先を考えていくというのが、今までのやり方で、漁業者にも生活があるので、キンメダイを獲れば売れるからと、それだけに集中して漁獲してしまう。そうではなく、しっかりとマーケティングや、マーケティングを考えながら売れる方向性を見つけていき、他の魚が売れば、そういった魚も獲るようになると思いますので、検討していただければと思います。</p>
藤井水産課長	<p>今後の検討課題としてエコラベルの推進等という項目を入れるべきではないかということでしょうか。</p>
三浦委員	<p>そうですね、例えば八丈島の魚とか、三宅島の魚というのが東京でそこまで有名なのかというと、エコラベルなどを活用して PR していけば、東京都の住民として、「ああそうなんだ、東京都に漁業あったんだな、食べようかな」とこういう動機づけになればいいなと、そういったイメージです。</p>
藤井水産課長	<p>エコラベル等については、現在の事業の中でも、支援対象とさせていただいているのですが、後年度負担とか、費用対効果の面で何て尻込みしているところがございます。</p>
三浦委員	<p>そこを助成金で少し進めるとかですね。</p> <p>また、沿岸漁業なので、魚を大量に獲るような、資源管理的に乱獲をしているわけでもないので、上手くそういったものを活用し、認証を取れば良いと思っています。</p>
座長	<p>はい、ありがとうございます。</p> <p>他にいかがでしょうか？</p>
木村委員	<p>はい、今日クサヤ加工場で長田さんが強調されていた中で、クサヤ液には、抗菌作用があるということを非常に強く言っておられていて、これを例えば、今東京農大の方で研究されているということですけども、医療用と</p>

かそういったようなものに発展させていくと、莫大な利益を得られる可能性があります。ところが海洋における細菌は、非常に多くの数があって、その中で具体的に社会実装して行けるようなものは極めて少ないわけなのですが、でも皆さん全世界でそういったものがないかということをものごく探求しています。我々が海外のEEZの中で水を汲むことすら非常に難しくなっているのはそういうことがあって、発展途上国では、もうそういったようなものの資源を囲い込みたいと思っているというところがあります。クサヤで、具体的に何かがあるかということはありませんが、クサヤでは、既に研究も進んでいるようだから、補助金を出すとか、医療系とか薬品系のところとも取り込みながらやっていくと、違う視点で水産振興にも繋がりがつつ、やれるのではないかと、これはかなり大きな賭けみたいなものですから、やったからといって、莫大な利益を保証されるというのもほとんどないですけども、水産振興の中で細々といってもやっていく事には一定の効果があるのかなと、特に東京農大はやっておられるのだったら、もっと東京都も積極的に協力してもいいのかなという気がしますね。

藤井水産課長

新たな視点の方向提供いただきましてありがとうございます。

施策の①のところで、大学と連携した移動生態等の解明という一文を入れてさせていただいておりますが、ぜひ他の委員の皆様も、海洋性細菌とか、今回のクサヤの件ですね、こういったものの利活用などについて、単純に水産に限った振興ということではなくて、医療用その他の利活用についてのネットワークであるとか、知見とかっていうのをもしおかしただけるような余地がありましたら、是非お力添えをいただきたいなというふうに思っております。合わせましてよろしく願いいたします。

中奥委員

マーケティングっていう意味で、ターゲットを絞っていくことは非常に重要だと思うのですが、一方で差別化を図っていくということも重要なかなと思っております。昨日お話を伺って、キンメダイは差別化が難しいのかなという気がするのですが、今日見させていただいてクサヤは他産地との差別化が可能なもので、特に今日の話をお伺って、いわゆる健康に良いとか言うことが、例えば細菌の作用として、健康にも良いんだよということが言えたりすると、すごい差別化されて、普通の加工食品とは1歩違った売り方ができるのかなという気がします。

もう1つ、女性起業家ということで、関先生などのご努力によって全国各地に漁村女性のいろいろな取り組みが広がって、すごい成果を上げていると思うのですが、あちこちで聞く話なのですが、第1世代の皆さんが高齢化して疲れてきて、その次のステージを続けていくというところが、なかなか難しくなっている、昨日の女性部さんも、だんだんと人が減ってきて、

藤井水産課長	<p>若い奥さん 2 人入ってくれて加工場を続けているっていうお話ですけども、これを続けていくためのやり方というのですか、先生方でアイデアとかあれば教えていただきたいなと思います。</p> <p>そちらにつきましては、次の④のところ頂ければと思いますが、この場でも、是非何かございましたら。</p>
座 長	<p>はい、おっしゃる通り、20年前ぐらいから活動を始めてきた人たちがだんだん年配になって来られて、辞めるかどうかで悩まれているところも結構あります。その中で、例えば新たな人との出会いによって事業承継をすることができた事例なんかもありますし、それはそのそれぞれのグループで色々あるのですが、少なくともその八丈島の女性部さんの場合は、若手も結構入ってきていて、メンバーも変わったなという印象も受けました。新たなメンバーがきちんと経営ができていくように育てていけるかどうかというところが、一番の課題なのではないかなと思います。昨日説明をして頂いた、奥山さんがほぼ全部抱えて仕切っていたらいいかなと思うけれども、その技術というか、それをどう次の世代の人たちに伝えていけるのか、引渡していけるのかということは、やはり人材育成という枠の中で考えていかなければいけないことなのかなと思います。</p>
三浦委員	<p>女性部さんの話はつぎにあるので、そこで言わせていただきますけれど、先ほどのその加工場のクサヤの菌なんですけど、生菌の時にはそういう抗菌作用があるということで、ただ焼いてしまったら全部死菌になってしまうということですよね。そうした中で、ヨーグルトでも生きてまま届いたほうがいいのか、死菌でもヨーグルトではすごい効果があると言われていました。その成分が乳酸菌を増やす効果が非常にあると言われていましたので、そういうのも踏まえて、クサヤを食べたらヨーグルト的な効果があるとか、朝食食べればなにかに効くとか、そういうわかりやすいメッセージが大学等と組みながら出せたらいいのかなと思います。普通に考えれば焼いて死んだ菌を食べて効くのかなとか思うわけですが、食品としてその機能を補助するような効果が出たら、興味を湧く人も出るのかなと思います。</p>
座 長	<p>そこに関連して、今思い出したことがあるので、お話させていただきたいのですけれども、福井県の美浜町というところがあって、へしこと言って、魚の糠漬けですよね、主に鯖の糠漬けをやっているのですが、そのサバの糠漬けを食べると、結構辛いものなのですけれども、1 日何グラムと決めて食べて行くと血圧を下げるということを福井大だか福井県立大の先生が学会で発表されて、美浜町はそのデータを使ってその先生と連携をして、健康食で</p>

もあるのだよと、そういうふうにしてバンバンPRしています。美浜町は「へしこの町」として商標登録されていて、へしこを全面的に売り出しています。へしこ目当てで観光客もくるし、その地域の中に十数社作っているところがあって、それは中規模なところから、本当にお母さんたち数人でやっているところまで色々なのですけれども、いろんなへしこがあって、道の駅に行くと誰誰さんのへしこは甘目の味とか、いろんな味があるわけですね。色々食べて私はこれが好みとか、それぞれのファンを作っていくというような戦略で、へしこの町として売り出しています。この例からいけば、もちろん数量的にできるかどうかなどの問題もあるのですが、クサヤってすごいなと思います。しかもへしこはノルウエー産のサバを使っているそうなのです。それは色々理由があって、ノルウエー産の方が脂があっておいしいのですが、今、サバの養殖を始めて自分たちのサバでへしこを作るという動きも出て来ています。それに比べたらクサヤはまさに島の魚を使って、島の文化で、科学的な裏付けされたストーリーがあって、これはものすごい説得力あるな、すごい魅力だなと思いました。そういうところを上手にを使って、今あるものの魅力というものも、掘り起こして見せていくことも必要なのではないかなと、すごく可能性を感じました。長田さんのあの熱意とか、話をしたら食いつく人いっぱいいますよね。それだけ長田さん自身が魅力ですね。そういう人も含めて、マーケティング・ブランド化していくのもありだと思います。

他に何かありますでしょうか？

そうしましたら続いて施策展開の方向性④について説明をお願いします。

藤井水産課長

それでは4ページをお開きください。

施策の転換の方向性④漁村地域活性化、人材育成分野でございます。

最初の視点では、漁村地域の活性化を挙げさせていただいております。

こちらでは、漁村を支える女性の活躍促進の観点とされるコメントとして、全国の漁村女性グループでは高齢化が進みまして、活動の岐路に立つケースが非常に多くなっているといったような状況のご紹介がございました。

こういった中で、世代交代期に入った漁協女性部の活動をいかに支援していくかが重要であるというご意見を取り上げさせていただきました。

また、地域の魅力を高める新たな特産品の開発としては、例えば、八丈島の例を挙げさせていただきまして、新たな商品開発にあたっては、ファン層、例えば学校給食を巣立って大人になった子供たち、こういったものと連携をした取り組みが効果的ではないかというご意見をいただいております。

さらに地域の活性化には、漁村の経済、あるいは文化活動を重視し、多様な人材交流機会を確保すべきとの御意見も頂戴いたしました。

次の視点であります人材育成では、このまま漁業が衰退を致しますと食糧

の安全保障面、食糧の安定供給面からも問題となるといったご意見がございました。漁業後継者や漁協職員の確保育成、これを課題として取り上げさせていただきます。

こうしたご意見を踏まえまして、施策の方向性でございますが、漁村の地域の活性化という視点では、まず、漁協女性部の食育活動の支援、また消費者の意見をふまえた新商品、新規の魚種の加工品開発等の支援等検討して参りたいと考えております。

また、漁協女性部の活動促進や地域の魅力を高める特産品がそういった取り組みによりまして、漁協女性部の活躍促進、地域の魅力を高める特産品開発につなげていければと考えております。

また再掲となりますけれども、他地域への視察、交流の場への参加を支援致しまして、漁村地域の活性化に繋げていきたいと考えております。

人材育成の観点では、漁業人材とのマッチング機会を充実するなど、漁業の担い手の確保、育成対策の充実を図ってまいりたいと思っております。

一方、今後の検討課題といたしまして漁協女性部との円滑な事業継承の支援、また全国的に海業といったような事も色々取り上げられておりますけれども、海業の導入による漁村地域の活性化についても、その可能性を検討して参りたいと考えております。

以上が漁村地域の活性化、人材育成についての説明になります。

座長よろしく願いいたします。

座長

はい、説明ありがとうございました。

それでは、この方向性④につきましてご意見ご質問等、よろしく願います。

三浦委員

漁村の女性部は、漁協に各女性部があり、県漁連がそれを取りまとめて、県の女性部というものがあるのですが、今全国的に、脱退や解散が増えまして20数県に減ってきています。それぐらい後継者がいなくなっているということです。高齢の方が非常に多くて、会長さんも、70歳、80歳の方も居られるような状況です。なかなか次の人たちが育って来ていないという中で、漁協の奥さん方だけではなく、地域の加工屋さんですとかその地域全体として盛り上げようという人たちも仲間に入れながら女性部が中心となって新たな組織を作るなどしながら、組織再編をしながら進めているというのが現状です。漁業者も減ってきている中で、その奥さんたちだけで行くことが、厳しくなっているのが現状だと思います。

また、海業について、国が今必死に推進を進め、水産基本計画の中にも入れこんでいるわけですが、全漁連でも、海業については都市型の海業と漁村型の海業があります。都市に近くて観光客がいっぱい来る海業と人があまり

	<p>来ない中での海業ではやり方が異なります。それぞれ類型化をしながら事例を集めて配信しております。その事例展開と合わせて、どうしてその海業が成功したのか、リーダーシップを取る方がいたり、様々な業態と提携している方がいたりなど、成功のノウハウを深堀しながら調べておりますので、そういったものも参考にさせていただければと思います。今度資料をお送りしたいと思いますので、よろしく願いいたします。</p> <p>都市型と漁村型はやはり全然違っていて、漁村型の場合、なかなか人が来ない中で、常設の施設などを建設してしまうと、絶対に経費倒れになることが多いので、常設ではなくてイベントごとに動かせる、イベントカーのようなものでできるものにしようとか、様々なことが考えられています。</p>
藤井水産課長	<p>ありがとうございます。</p> <p>1点目の女性部の活動継続支援という観点で、なかなか漁業者の奥様方だけでは継続が難しいという中で、昨日も視察いただきました漁協の女性部ではお魚研究会という別部会をつくりまして、商工会の奥様であるとか、あとはまるっきりフリーの奥様とかも加工の部分だけ携わるという事例ですが、また関先生、副島先生の方から他にもそういった地域の事例がございましたら、この後ご紹介いただきたいと言うふうに思っております。</p> <p>また海業につきましては、ぜひ後ほど色々資料をいただければ、検討して参りたいと思います。昨日の支庁の概要説明の中でも八丈島の取り組み、あるいは青ヶ島の取り組みのご紹介ありましたけれども、特に青ヶ島のように非常に人数も少ない島では、地域の資源を活用し、そして生活を成り立たせているという点では、いわゆる原始的な海業的な暮らしはこれまでもあったのかなと思いますが、最近の国が推進している海業の情報などを取り入れながら、今後の検討課題として検討していければと思っております。</p>
三浦委員	<p>漁師が焼酎作っていますものね。</p> <p>海業ですね、まさに漁師の焼酎で出したらどうですか。</p>
座長	<p>なんかその海業って、そもそもはその地元の漁業、水産業をきちんと、下支えしていくための色々なプラスアルファの活動なのだろうというふうに、私は理解をしていて、だから海業で何か物を作るとかは、それが必要だったらそうする話であって、初めから作るどころから入るのは間違いだと思っております。今、水産庁が言っている海業というのは、漁港の用地の使い勝手を、少し規制緩和をして色々な使えるようにという、そういう発想で入っているのかなと思うのですが、それはそれとして、本来の意味の海業というのは、漁師さんや地域の人々が協力をしながら加工品開発したりとか、体験なんかをしたりとか、何か人を寄せてくる企画をしたりとかとい</p>

三浦委員	<p>う、そういうところが原点ではないかなと思っております。だから地元の漁業、水産業を支えるということは、揺らいではいけないもの、1 番の目標なのかなと思いました。</p> <p>まさにその通りです。漁業が真ん中にあるということで、国も漁村ならではの地域資源の価値、魅力というものを生かしながら、漁業と相まって、それを海業として展開をして行くということで、漁業に支障があるようなものについては、それは漁業者の理解が得られなければ進めないという方向性も法律で定められています。我々としてもしっかりと考えながら、漁業振興と相まって地域の所得があがったり、人が訪れてくれて漁村と都市の交流がはかれたり、さまざまなことをしながら盛り上げていく、そういうような意味で海業をやりたいところはやればいいですし、我々は漁業一本でしっかりとやっていくということは、地域でそれを判断したのであればそのとおりにやればいいし、その中間でどんな海業をやったらいいか悩んでいるところとか、さまざまな地域によって違いがあるので、それは一つ一つの地域の実情に合わせてやっていくというのが海業だと思います。</p>
木村委員	<p>東京都に質問なのですが、監督官庁どこかわからないのですが、総務省だとか地域振興するために、若手の人が移住して、そこでたとえば起業をして3年ぐらいだったかな、補助金がきちんと出るという制度がありますよね。</p> <p>地域おこし協力隊ですね、地域おこし協力隊あれは活用されているのですか？</p>
藤井水産課長	<p>内水面では、一部活用している状況があるという話を聞いております。</p>
木村委員	<p>海の方でも何かそれは出来ないですかね、離島振興で。</p>
藤井水産課長	<p>そうですね、基本的には町村が、受け皿としてやっていかれる形かなと思うのですが、中奥委員の方で何かそういった情報をお持ちですか。</p>
中奥委員	<p>総務省の事業で、事業主体は市町村、市町村が雇っているいろんな仕事についてもらうってということで、やっているの、内水面でも今いくつか地域おこし協力隊で入ってもらって、漁協の仕事を手伝ってもらうとか、そういった例が出てきています。</p> <p>その先なのですが、先生がおっしゃったように、3年という一応の期限があるものですから、その後、その地域に定住してもらうということが理想なのですが、なかなか地方で1年間食べていけるような職業がないので</p>

	<p>すよね。そこで総務省は、その先の手当として、地域活性化のための事業共同組合を作って、組合員となったいろいろな業種のところに、この期間はこの業種、この時間はこの業種、この期間はこの業種ということで、1年を通してみるといろんな仕事をしながらマルチワーカーで食べていけるという、そういう仕組みを今作っているの、そういうものも活用しながらやっ行って行かれたらどうかと思います。</p>
	<p>特に昨日青ヶ島の話が出た時に皆さん色々なことやっていますという話があって、まさにマルチワーカーですよね。おそらく人口減少はこれから避けられないので、地方はとにかくマルチワーカーを進めていくしかないのではないかと思います。色々なことをやらないと地域が回りませんし。だからその1つの道として、そういった活用があるのかなと思います。</p>
<p>中野島しよ農 林水産総合セ ンター所長</p>	<p>地域おこし協力隊ですが、利島と、あと記憶が定かじゃないですが他のいくつかの島で活用して、漁協の支援ですとか、そういったことをやっているという話は聞いています。</p>
<p>木村委員</p>	<p>それは成功していますか？</p>
<p>中野島しよ農 林水産総合セ ンター所長</p>	<p>人がどこの島もいなくて困っているの、かなり助かっているという話を聞きますね。</p>
<p>木村委員</p>	<p>全国平均だと6割ぐらいが成功して3年後も定住をしてくれるのだけれども、それに満たない所も多くて問題だという話を、これはテレビの報道であったのですが、ぜひそういうものを東京都として市町村に働きかけていただいて、やってみたらどうか。せっかく国がやる事業なので、それを活用しない手はないなと思います。1人とんでもない才能のある人がくるだけで、とんでもなく爆発的なパワーを持ちますので、ある意味では賭けの部分も多少あるのですけれど、そんなに低い賭けではなくて、そこそこいい確率でとんでもない人材が来てくれる可能性があるの、ぜひ活用されたらどうかと思います。</p>
<p>副島委員</p>	<p>関連する事例でご存知かもしれないのですけれども、三重県の河鹿で「河鹿のあぶり」というものを扱う若い女性がいるのですけれども、彼女は地域おこし協力隊で最初その地区に入って、その地区でも伝統的に取れた魚をおばちゃんたちが一生懸命開いて燻して干物にしてというものもあるのですけれども、地域おこし協力隊で行った彼女が、その商品の魅力に取りつかれて、協力隊が終わった後、そこで起業して自分が売る立場です、作るのは地</p>

<p>座 長</p>	<p>域のおばちゃんたちですという形で地域で作ったものを取り扱って、自分が全国に売っていくという優良な事例があります。そういうふうに関がっている事例が生まれても面白いなというのを木村先生のお話を聞きながら思いました。</p> <p>私も今、木村先生のお話で思い浮かんだのが、やはり三重県なのですけども地域おこし協力隊で地域に入ってきた方が海女をやっています。海女をやりながら、地域活性化のいろいろな企画をしたり、そういう仕事もやるという形で何年もがんばっている女性がいるのですけども、そういうのを見ていて、その受け入れ先、受け入れ側の課題も大きいなと思っています。海女が減少しているといっても、新規参入を喜んで受け入れる地区が沢山あるわけではないのです。そういう中で、今彼女がいる地区だけが受け入れをしてくれたということでした。漁師もそうですね、後継者は必要だけれど、ここの漁師さんが新規で人が入ってくることを望むかどうかというのは、また別の問題なのかなと思ったりします。</p> <p>定置網とか旋網とか、雇われ漁業者として雇われるのは割とスムーズにいきますが、沿岸漁業の1人として個人事業主として漁師をやるというのは、これは全く別のところから来た人にとってはハードルがすごく高いですよ。沿岸漁業者が減って困っている地域もあるわけですけども、そうすると親方みたいな人々について漁業を習って独り立ちしている場合、県なりとしてはプログラムを作っても、それを受け入れる漁師がいないとか、人間対人間なので合う合わないというのが出てきたりとか、色々な課題があるわけです。そういう課題もあることも知りつつ、どういうシステムを作っていくのかというのは本当に考えていかなければいけない。やらなければ分からないところがあると思うのです。</p>
<p>三浦委員</p>	<p>国の事業で後継者を入れる場合において、漁師が研修生を受け入れて、一緒になって操業していかないとなかなか伝承できないという中で、その受け入れるお金自体は親方に支払われ、そこからその働きに応じて研修生にも給料が渡るような形になりますが、そうした中でもやめてしまう人も多い状況です。関先生のおっしゃる通り、もうこれをやったからすべて解決ではなく、我々そういうものを推奨しながら、浜でこの子が来てくれたから浜が活性化したとか、そういう良い声も聞こえてきますし、駄目な場合もあるということです。試行錯誤しながら、進めていくしかないのだと思っています。</p>
<p>藤井水産課長</p>	<p>施策の人材の育成確保のところ、マッチングの件を、今回は今後の方向性としてあげさせていただいておるところですが、先ほど三浦委員からございました漁業後継者対策として受け入れをする親方への支援も、今の施策の</p>

中でやっているところがございます。そういったものと合わせて、よりマッチングの機会を増やすということを、今後方向性としては検討してまいりたいと思っております。

また、外部人材の活用についてということで、今回各委員の皆様からご提言いただきました。後ほど最後の⑤のところの内水面振興では、外部人材の活用というところを今後の検討課題として入れさせていただいておりますので、こちらの④のところでも、今後の検討課題として外部人材の活用といったような項目なども付け加えさせて頂ければというふうに思っております。ありがとうございました。

座 長

ありがとうございました。

方向性④について他にもご意見等ありますでしょうか？

そうしましたら、本日の最後になりますけれども、施策展開の方向性⑤について説明をお願いします。

藤井水産課長

それでは5ページ目になります、最後でございます。内水面漁業活性化でございます。

こちらでは委員の皆様から頂戴いたしましたご意見を2つの視点でまとめて、お示しをしております。

1つ目の視点、魅力的な釣り場作りでございます。

第一回の会議において、委員の皆様から釣り人に選んでもらえる釣り場づくりが重要であるといったご意見をいただきました。

ただ、釣り人の中にはマニアからファミリー層まで、多様な層があることから、その釣り場ごとのコンセプトを明確にし、ターゲットを絞った釣り場づくりを進めていくことが重要である、といったご意見を頂戴致しました。

また、川や湖などで釣りをする場合には、遊漁券を購入しなければなりませんけれども、遊漁券の電子化がこれは全国的に今約5割まで進んでいるというような状況のご報告もございました。この入漁券、進んでいる状況でございます。そういったシステム導入にあたっては、釣り人の属性、或いは行動特性も把握できるというメリットもあるという話のご紹介もありましたので、遊漁券の、特に遊漁者の確保に向けた電子遊漁券の導入と、得られたビッグデータを活用図るべき、こういったご意見を今回の意見として挙げさせていただいております。

さらに若者や地域外の人感性など積極的に活用致しまして、川の魅力や漁協の活動を発信することが、内水面漁業の振興や地域の活性化につながるといったようなご意見も頂戴をしているところがございます。

また、2つ目の視点となりますが、多摩川のアユの活用についてでございます。こちら多摩川の支流であります秋川では、全国利きアユ会で、三度も

準グランプリを取っておりまして、特に河川環境のバロメーターと言われております、多摩川のアユの資源の安定化やブランド化に向けた PR が必要であるというご意見をいただいております。

こうしたご意見に対しまして、現在検討している施策の方向性、右側でございますけれども、まず 1 点目の視点として、魅力的な釣り場づくりでは、釣り人のニーズに応じて、例えばマニア向けにキャッチアンドリリース区を設けるなどの漁協による多様な漁場づくりを支援するほか、電子遊漁券の導入やその活用を図って遊漁者の確保につなげてまいりたいと考えているところでございます。

さらに、都民や釣り人など、若者や外部の方の意見も取り入れをいたしまして、新しい釣り場作りを進めていきたいと考えております。

2 つ目の視点として多摩川のアユの活用ですけれども、現在も、例えばアユの遡上促進のための魚道管理などを行っておりますけれども、遡上アユの資源の安定化に向けて江戸前アユを増やし、活用するための取り組みの支援を検討して参りたいと考えております。

今後の検討事項と致しましては電子遊漁券導入後のビッグデータを活用したマーケティング戦略の構築、内水面漁業振興への外部人材の活用などの可能性を検討して参りたいと考えております。

以上が内水面漁業活性化についてのご説明になります。

座長よろしく願いいたします。

座長

はい、説明ありがとうございました。

それではこの方向性⑤に関してご意見ご質問ございましたらお願いいたします。

中奥委員

まとめていただいて、どうもありがとうございます。

内水面の場合、海面の漁業とはだいぶ状況が違いまして、遊漁という点が 1 つ大きな柱になってくるということで、海の海業とは違うのですが、地域資源を活用してその魅力を発信して行く、それによって地域を元気に、豊かにしていくという点では海業とも共通する部分あるのかなと私は思っております、それをずっと以前からやっているのが内水面漁業であるということで、こういった取り組みを、ぜひ進めていただきたいと思っております。

もう 1 つ、多摩川のアユの活用ということで、先ほどご説明の中でありましたように、環境のバロメーターとも言われるものなので、環境が大事だということで、川づくりについて、今魚道のお話もありましたけれども、魚道だけでなく、もともとあった川の生息環境に戻す、国交省は多自然川づくりと言っておりますけれども、そういったものを、多摩川で実践していただきたいなと思っております。その時に、私からのお願いなのですが、是非その

藤井水産課長	<p>多摩川の川と魚の事に精通している漁業協同組合の意見というのは積極的に取り入れていただきたいと思います。やはり魚のことは漁協に1番ノウハウがありますので、それを踏まえた川づくり、魚道の整備、そういったものを進めていただきたいなと思います。</p> <p>これ、私から要望です。</p> <p>魚道会議につきましては、もうかれこれ20年ぐらいになりますけれども、流域の多摩川流域の自治体、あるいは多摩川にあります河川とか河川構築物の管理者ですね。あるいは、我々東京都含めまして、魚道の連絡会を作っております。これは国交省にも入っていただいておりますが、こういった中でアユの上り下りの時期に合わせて、魚道の閉塞状況をチェックして改善をするといったような取り組みを進めておりますし、また、今年度の東京都の取り組みになりますが、魚道機能の補完的な機能として、なかなか魚道にアユが進んで行けないという状況があるので、たたきのところに滞留しているアユを遡上させるために、たたきの脇に、いわゆる石組魚道と言われているものを作りまして、滞留しているアユも堰を遡上できるような取り組みなども始めたところでございます。当然そういった取り組みにあっては、現場のことを1番よく知っている漁協の意見などもしっかり取り入れながら進めているところでございますが、先生からご意見いただいた、今後の施策の中にも、しっかりと漁業者、漁協の意見を取り入れて進めていければというふうに思っております。</p> <p>ありがとうございます。</p>
中奥委員	<p>なかなか河川横断構築物は1級河川、国交省管理の河川であっても、それぞれの管理者が別になっているものですよね、それぞれの水利権のためにですね。そこの調整というのはなかなか難しいと思いますので、水産部局が主導していただきたいと思います。よろしくをお願いします。</p>
座長	<p>はい、ありがとうございます。</p>
木村委員	<p>産卵河床の整備はどうなっているのでしょうか？</p>
藤井水産課長	<p>こちらも10月の末ですか、多摩川の中流域になりますけれども、アユの産卵場造成については、現在内水面漁連に対して都からの補助事業と致しまして、取り組みへの支援をやらせていただいております。合わせてこの3年につきましては、親魚放流、産卵期に入った親アユの放流や人工受精技術、こういったものも内水面漁連に習得していただくということで、講習会や親魚放流の経費などについて、支援させて頂いております、3年間経ちま</p>

	<p>したのでこれ現場で実装して行くようなことも、検討しているところでございます。</p>
木村委員	<p>はい、分かりました。</p>
座 長	<p>他にございますか。</p>
三浦委員	<p>この多摩川のアユの活用のところで、江戸前のアユを増やして活用するための取り組みと書いてありますが、これは天然のアユを増やして、それを活用していくという、例えばどのようなことを考えていらっしゃるのでしょうか？</p>
藤井水産課長	<p>そうですね。</p> <p>観点が違うかもしれないのですが、今の多摩川では、各漁協で他地域からアユを持ってきて、釣りの時期になると放流したり、今回の親魚放流もそうなのですが、他所の養殖場から親魚を購入してきて増やすということをやっておりますので、まず漁協が義務放流としてやっているもの、あるいは産卵親魚の放流などについては、自前のアユで、取り組みができないかなということなども取り組んでいきたいと思っております。そういった中で、多摩川独自のアユを、多摩川の中で増やしていくような取り組み、東京いわゆる江戸前アユですね、こうしたものを自前で、手当していくようなことをやっていきたいと考えています。</p>
三浦委員	<p>昔は、釣りのシーズンになると、琵琶湖などから稚アユを持ってきて放流していたというイメージがあるのですが、それを自前のものに変えていく中で、ブランド化していきたいということですね。</p>
藤井水産課長	<p>そうですね、他県から買う場合には、漁協も持ち出しがありますけど、いわゆる多摩川の中で自前のものを購入していければ、上流と下流の漁協の中でのお金のやり取りとか、お互いに Win-Win になったりするところも有りますし、そういった意味で極力自前のアユで取り組みを進められるようなことを考えていきたいと思っております。</p>
三浦委員	<p>アユが増えたイメージがあるのですが、河口に行くと稚アユが結構いたりとか、そういうのが見受けられるようになったので、ちいさなその千葉の花見川とか、そういうところでも稚アユが見られたりするので、増えてきているのかなと思いました。</p>

藤井水産課長	<p>そうですね。やはり多摩川の水質改善で、いわゆる遡上するアユというのはかなり増えてきております。我々も目標として、毎年約2百万尾のアユを遡上させようということでやっておりまして、順調に推移をしていたのですが、令和元年の台風で多摩川が出水致しまして、漁場が荒れたということで、3年ほど低水準の遡上が見られたわけですが、先ほど申し上げました産卵場造成の支援であるとか、親魚放流などに取り組みみしました結果、ここ2年ぐらい200万尾まで遡上が回復をしている状況です。過去には、ピークには1000万尾ぐらいの遡上をしたこともありましたので、そこに比べるとまだ水準的には低いのですが、第1目標はクリアしている状況ですので、今後こういうレベルをしっかりとキープしていくようなことをやっていきたいと考えております。</p>
中奥委員	<p>今、三浦委員からご指摘があったように、自前の魚を育てていくということは、とても大事なことだと思っております、かつては琵琶湖のアユを全国に持って行って放流するというのも、今でもやっているのですけれども、それによって病気が広がってしまったと言う反省もあり、またアユの研究がされて、遺伝的に河川によってだいぶ違いがあるということがわかっています。そういう意味で、やはり東京湾のアユを残して増やしていくということは、非常に重要な取り組みだと思っておりますので、ぜひその方向で進めていただければなと思います。</p>
三浦委員	<p>スーパーに、今後、例えば江戸前の天然アユとか並ぶ可能性というのが出てくるのですかね？</p>
藤井水産課長	<p>そういったようなところを目指していければという野望を持っております。</p>
三浦委員	<p>スーパーと言わず、料理屋さんで並んでいくといいですね。</p>
藤井水産課長	<p>特に多摩川の中流域、上流域ではそういったものが観光客含めて民宿とかホテルとかで出るようなところが、実現できると我々としても嬉しいなと思います。</p>
三浦委員	<p>分かりました。</p>
中奥委員	<p>他の地域では、アユの買い取りをやっている地域もあつたりしていますね。多摩川もやっているのですかね？</p>

藤井水産課長	上流のほうの漁協では、一部そういったこともやっているようですね。
中奥委員	遊漁者さんが釣られた鮎を漁協が買い取ってくれて、それが市場流通に乗るといことですね。そういうのも我々がアクセスしやすくなるということかなと思います。
藤井水産課長	蛇足ですけども、遡上数が増えていった場合に、上流まで上って行かないと下流中流域で滞留をしてしまいますと、アユも大きくなならない、友釣りが出来ないような群れアユになってしまうという問題もあるので、魚道の維持管理含めて、帰ってくるアユを登らせていくかというような取り組みも合わせて重要になってくるかなと思います。
木村委員	遡上数が多くなってくれば、餌が必要になってきて、苔だとか岩に付着している植物ですよ、ああいうふうなものがきちんとあるかどうかなんですけれど、その点はどうなのでしょう？
藤井水産課長	島しょセンターも内水面の研究をやっておりまして、今細かな数字は持ち合わせておりませんが、そういった河川環境調査等を行っておりまして、ただ、やはり 1000 万尾ぐらい遡上したような時にはですね、アユも 10センチになるようなアユもいましたので、それをできるだけ上流の方に、例えば汲み上げをやって人為的に汲み上げて上流に持っていくとか、そういった取り組みもやってきたところですけども、石組魚道などの取り組みもやっておりますので、できるだけ上流部に分散させることが重要かなと思っています。
木村委員	環境収容力の問題が結構重要だと思います。河川毎に、自然もあるでしょうから。餌となる苔であればいいのですが、そうではない植物も最近増えているようで、ノロって言いましたっけ。
中野島しよ農林水産総合センター所長	ミズワタクチビルケイソウです。
木村委員	もう日本全国出ていると思うのですが、対策をどう考えていくのか、かなり重要なかなと思います。
藤井水産課長	ミズワタクチビルケイソウは、多摩川で出ておりまして、今は対症療法しかないのですが、他の地域に分散させないような取り組みが中心にな

	<p>っております。</p>
木村委員	<p>はい、わかりました。</p>
座 長	<p>他にご意見等よろしいでしょうか？</p> <p>そうしましたら①から⑤まで各項目について説明と意見交換が終わったので、まだ時間がありますので、全体を通しての意見、それから加えての提案でも構いませんので、お願いします。</p> <p>日比さんにもまとめであったり、今回の視察を通してありましたらお願いします。</p>
日比オブザーバー	<p>はい、ありがとうございます。</p> <p>オブザーバーということで私のつぶやきと思って受け取って頂ければと思います。</p> <p>まずは非常にわかりやすいプレゼンテーションですね、今回、今後の施策展開の方向性ご説明頂きありがとうございました。また委員の先生方のご意見というのも、私にとっても非常に大変勉強になる内容でした。</p> <p>今回の視察も含め、また今の色々な議論をしております、私を感じたのは今これ日本だけではなく、世界の色々な国で、それも水産だけではなく、農林水産業をどうやって、その場で活性化してやっていくかということというのは、実は色々なところで聞く話ですね。巨大なプランテーションは別としても、私のいました大洋州の島しょ国などでも、実は漁業離れ、あるいはみんなそういうような仕事ではなくて、特に若い方が IT に移りたいと言うことで、若い人がいなくて困っているのだと聞いていて、こちらで話合った内容というのは、ユニバーサルだなというのを感じました。</p> <p>その中で、まず1つ先程の木村委員がおっしゃったような、今その細菌であるとか、酵素とか、そういうものをどのような形で医療や或は美容、そういうようなものに活用していくのか、こういう資源を活用していくのか、あるいは健康食品として、熾烈な競争が実は水面下で起こっているということです。以前、酵素会社の社長さんとお話したのですけれども、実は知れば知るほど、自分たちがいかにこの多様性を知らなかったかというのが分かってきたというようなことをおっしゃっていたのですね。もっと知っているのだらうと思ったら、実は掘り下げたらこんなに色々なものがあつたのかということ、ですから、この部分が知的財産権ではないのですけれども、世界中で厳しい競争が、もう既に起こっているというのを私も聞いております。</p> <p>あと、マーケティングという言葉がありますが、過疎化に苦しむ農村ではマーケティングのプロに入ってもらうことによって、どういう形でうけるようにするか、大きな市場に参入できるようにするかというのは、やっぱりそ</p>

の分野のプロが必要であると。生産加工の人はそちらは一流だけれども、マーケティングは専門分野ではないということで、そこをどうやってその違った業種の人たちを巻き込みながら、市場に介入していくのかという、参入していくのかというのは非常に大きいというのは、これも色々なところで同じようなこと聞いております。

また、先ほどから観光とか、インバウンドの話も出ていますのでけれども、私が聞いた話によると、今、日本に来ているインバウンドというのは、これまでよりも、普通の観光に飽き足りない人たちが出てきているのですね。昔、日本人が団体旅行でどこかに行って、だんだんと団体じゃなくて、自分でなんか日本人がいないところに行くっていう人たちが出てきたと同じように、今、日本に来ている人たちもみんな東京、京都行くグループと、それから、いやもうああいう外国人ばかりいるところはいやだからって行って行ったら、外国人が居たわっていう話を皆が言っていたりして、そういう人たちにとってみれば、まさにこちらの八丈島は、非常に大きな魅力を持っていると思うのですね。

その中で非常に面白いなと思ったのが、今若者が割と旅行する時に見るのが Google MAP なのです。マップに何がポツと出てくるかによって、みんな割とさささっとう方向性を変えていく。あとは若者世代の中で流行っている、日本の観光行くならここですよってインスタがあるのです。それを見ると、もう私こんなところに行ったらこんな臭いもの食べたわとか、こんな面白いものがあったわというので盛り上げて、逆にそこに人が殺到するというのです。ですから、そういうインフルエンサーでもないのですが、そういうところにうまく届くような形で、こちらの魅力というものをいせれば、非常に大きいのかなというふうに思います。

その意味でいくと、例えばクサヤだけのために多分来る人はいないけれども、ここに来て、例えば観光、あるいはスノーケリングに行っただけでも、一緒になってクサヤを食べて面白かったことで、来た時のモデルコースじゃないのですが、この分野だけではなく色々なところに行けると言うようなことを前面に出せると、非常に面白いのかなと、既にかなりやってらっしゃるっていうのはわかりました。

あとはですね、先ほど、その海洋資源の変容に関するさまざまな原因究明、データ収集、分析、エビデンスを集める必要があると、正に本当にそれは重要なことだと思いますし、この地域で、これまでのやり方で様々な生物多様性があり、それを利用してきたと、そういう希少種なども含めてどういいうものがあり、これまでどういいうような形で、例えばこれまでのその地元の漁師さんのやり方だと、そういうものを守っていくことになるというように、そういうエビデンスとか、そういうものをつけることによって、生物多様性の分野に繋げると、またもう少し、発信力に膨らみが出るのではないかと

<p>座 長</p>	<p>なと思いました。</p> <p>以上私からのつぶやきでございます。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>どうもありがとうございました。</p> <p>まだ時間がありますので、他委員さん、ぜひ他言いそびれたこととかあると思いますので、いかがですか。</p> <p>では、私から、クサヤの加工場行った時にすごく感じたのですけれども、そのクサヤ菌の研究を熱心に東京農大でされていると、でもクサヤって、実はその地域の漁業ともものすごく係りがあって成り立っているものですよね。そうしたら漁業研究とか水産資源の研究っていうものともリンクする。それからこの八丈島で言えば、八丈島っていうのは文化的にも非常に面白いところですよ。流刑地という歴史を持ちつつ、そういう外から入ってきた文化が根付いて、独自の文化を作っているっていうようなこともあると。そうするとこの八丈島という 1 つの島の中でも、本当に研究テーマがゴロゴロしている宝の島だなというふうに思うのですね。だから、その八丈島で色々な分野の研究者がこう連携型の一大研究プロジェクトみたいのが成り立つのではないかなって、それはすごく面白い研究ができるのではないかなというふうに思いました。</p> <p>それともう 1 つ、他所から移住してきた人もたくさんいるみたいだし、もともとその中で、漁業やっていた人とか、住む、暮らしてきた人っていうのもいるわけですよ。そうすると、実はこの八丈島の中だけだって、すごく豊富な人材が居るのだらうなと思います。それはもう既にどこかの NPO なり、なんなりがやっていることなのかもしれないけれども、その島の人材バンクみたいなものがあつたら良いのではないかなというのを思いました。島にこんなプロがいるよとか、こんな技術を持った人がいる。それをオープンにすれば、なんかこういう時にはこの人に頼むとか、島の中で人材交流ができるとかなんかそんなのもあつたら楽しいかなというふうに思いましたので、提案をさせていただきました。</p>
<p>三浦委員</p>	<p>先ほども言いましたが、日本全国で、獲れる魚が変わってきて mismatch が起きており、例えば北海道ではサケが獲れなくなってきて、今ブリが獲れる。ブリを食べる文化がなかったところにブリが湧いてきて、ここ数年でその処理の仕方ですとか、血抜きとか覚えて、それを逆に産地である長崎等に売っています。長崎で私が見たのは、北海道産のブリとして長崎で売っている。そういうことが起こっていて、岩手の沿岸では本当にサケ定置が多く、これで、生計を立てていますが、サケは戻ってこない。他の定置網に変えようとしたり、そこでサーモン養殖をやってご当地サーモンを作っていた</p>

り、さまざまな取り組みを行ってきていますが、そういう変化を、ここ八丈島で非常に感じています。クサヤを作る上で、トビウオが獲れなくて、ムロアジが獲れないという中で、それを残すためには新たな商品開発ではないですけれど、ほかの魚で試してみても美味しければ買ってくれる可能性もあります。本来的には地場の魚を使うのが当たり前のことなのですが、本当にそれが獲れなくなり、なくなっていくのを見過ごすのか、それとも獲れた時のために残して行くのか、これも日本全体の問題となってきました。ただ、変化に対応しなければ生き残っていけない時代においては、そこも1つの考え方としておかないと、なかなか次に進めないのだろうと思っています。どのように解決していくか、私も見てみたいと思います。

藤井水産課長

はい、ありがとうございます。

重たい宿題をいただきまして、頑張ってみたいと思います。

副島委員

話が行ったり来たりで申し訳ないのですけれども、先ほどの地域振興と絡むところなのですけれども、既にもうそういうこと取り組まれていたら申し訳ないところなのですが。

先ほど関先生からも、大学と地域と連携して、色々研究もできそうだという話もありましたが、例えば私の大学でも、学生たちがその地域の、農学部でするので農業のこととか、その作り手のことをマップにしたい、だけどそのマップはもう紙ではなくて、インターネットで、スマホで見られるものを自分たちで作っているような学生たちもいて、どこそこに行けばなににながすごくおいしくって、こういう人たちが作っていますっていうその作り手のことも、自分たちでインタビューをして、スマホでクリックしたら全部見られるっていうようなものを作ったりしています。そういった意味で、八丈島なら八丈島で農業も漁業も含めて、色々な作り手のことも知れるような、そういう素材があるのかとか、なかったとしたらそういうところを作るのに、大学生たちのグループが例えば回ってそういうのを掘り起こしていくこととかできるのかなと思います。今日のクサヤのお話の時でも、うちのクサヤはこうなのだけれど、新島はもっと尖ったのでいて欲しかったのだけなどとか、色々な話で、島によって本当に全然違うのだなということは改めてわかったのですけれども、今、手元に八丈島のクサヤマップみたいのもあったのですが、その島で色々な島に分でそういうマップ、クサヤマップみたいなのでスマホでクリックすれば見られるとか、作り手も知れるっていうのとかもあっていいのかなと思いました。もしそういうことされていたら教えていただけたらと思いますし、されてなかったら一つのご提案として紹介いたしました。

藤井水産課長	<p>なかなか全体的なクサヤマップ的なものはまだないのですが、例えば、大学生の受け入れに関しては、今、島しょ農林水産総合センターの方の施設を建て替え時期に入っております、そういった中で何かございましたら。</p>
中野島しょ農林水産総合センター所長	<p>年に数名の、たとえば大学の大学院生ですとか、インターンみたいな形で受け入れたりしています。施設が建て替わったら、その形に合わせた形で、やはり色々なところと協力していくような、そういう意向はもちろんありますので、引き続き取り組んでいきたいと思えます。</p>
座 長	<p>中奥委員何かありますか。</p>
中奥委員	<p>本当にこれから人口減少というのは避けられないので、その中でその地域、どういう地域を作っていくのかというのは、別に水産業に関わらず、まさに地域の問題として考えていかなければいけないので、そういう意味では島というのは、それがいち早くやってくる、やってきているところなので、やはりそこでこうこれからの日本の地域のモデルになるような、取り組みができたらいいなかなというふうに思えます。</p> <p>感想めいたところで申し上げます。</p>
座 長	<p>はい、ありがとうございました。</p> <p>その他、よろしいでしょうか。</p> <p>はい、それでは活発な意見交換ができたと思えます、ありがとうございました。</p> <p>事務局には、今回の意見、色々で出たので大変だと思えますけれども、反映しつつ最終的な資料作成をお願いしたいと思います。</p> <p>それでは事務局にお返しします。</p>
小口課長代理	<p>はい、関座長ありがとうございました。</p> <p>では、次回のご案内ですが、来年の2月に第3回をやる予定をしております。</p> <p>次回には本日のご議論を反映させた都としての今後の方向性について、もう少し詳しいバージョンでご説明をできればと考えております。</p> <p>委員の皆様におかれましては、昨日の視察から、長時間にわたり大変お疲れ様でした。</p> <p>これをもちまして令和5年度東京の水産業振興に向けた専門懇談会の第2回を閉会したいと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>

一同	ありがとうございました。
----	--------------